



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スタディ・クエスチョンで読む古典 : 「政治学は科学として成りたちうるか: 理論と実践の問題」 (マンハイム) を読む (その3)
Author(s)	長島, 美織; Nagashima, Miori
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 72, 145-163
Issue Date	2019-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73280
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC72-7_Nagashima.pdf



《研究ノート》

スタディ・クエスチョンで読む古典 ——「政治学は科学として成りたちうるか — 理論と実践の問題」 (マンハイム) を読む—— (その3)

長 島 美 織

1 読解題材としているマンハイム論文と スタディ・クエスチョン・メソッドについて¹

社会科学において、古典の文献を読み込むことは、重要かつ中心的な課題である。しかし、これらの書物は、往々にして難解であり、安易な理解を拒むものである。また、現代においては、時間をかけてそういった古典を読むためのカリキュラムも不足しがちである。本稿は、このような現実を踏まえて考え出された、スタディ・クエスチョン・メソッド (Study Question Method) を紹介するものである²。スタディ・クエスチョンという形で予め示されたいくつかの問いを道しるべとすることで、その答えを探しながら、学問書の世界を歩いてみるができる。これにより、読者は、自分勝手な読みに落ち込むこともなく、また、途中で放りだしてしまうこともなく、先人の書物において、「学びの経験」 (Learning Experience) をすることができる。

本稿を (その3) とする一連の試みのなかで用いている題材は、カール・マンハイム (1893～1947) の主著『イデオロギーとユートピア』のなかの第2論文「政治学は科学として成りたちうるか — 理論と実践の問題」である³。

以下第2節では、(その1)⁴と(その2)⁵の内容が簡単にまとめられている。続く第3節冒頭で、本稿で扱うスタディ・クエスチョンを列記した後、第4節から、それらのSQを導きの糸とした学問的読みの実際が紹介されている。引用はすべて対象論文からのものであり、ページ数は、『イデオロギーとユートピア マンハイム』(高橋徹・徳永恂訳 中公クラシックス 中央公論新社 2006年) によっている。引用中の下線は筆者のものであり、強調のための点 (ゝゝ) は、原著による。

2 前回までの内容

（その1）では、上記論文の第1節「なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか」を読み解いた。この問いへの答えは、端的に述べると、「異なる政治思想は、異なる認識基盤を持っているから」である。

まずマンハイムは、第1節の冒頭で現在政治学と呼ばれているものは、行政学や歴史学、大衆操作のための様々な技法にすぎず、それらは真の政治学でないと退ける。それでは、マンハイム自身の考えている政治学とは何かというと、刻々と変わる現実を的確にとらえ、その場に応じた適切な判断を教えるものでなければならない。政治学は、一方で学として合理的に体系化されるべきであるが、また他方で流動する現実の状況を、人々が生きるなかで遭遇する問題連関に応じて正確に反映すべきものでなくてはならない。そして、そのような政治学は、可能であろうか、というのが、この論文の中心的問いである。

マンハイムは自身の考える政治学をより明らかにするために、「行為」（＝出来上がった体系のなかで、規定どおりにことを行うこと）と「行動」（＝動的な状況のなかで決断を伴ってなされること）、加えて、合理／非合理という二つの対比概念を導入する。合理化が進行している近代においても、経済（市場）と政治は、未だ完全には合理化されておらず、その非合理的な力の衝突と変容が繰り返される政治という領域のなかで、決断を要する非合理的な（＝動的な）行動を可能にするための知識体系が政治学である。いいかえれば、「流動的な状況のなかでの決断を伴う創造的行動についての科学的な知識体系」となる。

しかし、政治という「非合理的行動に関する学問化」が超えなければならない困難は、学問の対象の性質にも、学を作ろうとする理論家にも存在する。というのは、政治学が対象とするものは、前述のように常に変化・生成している現実であるので、その規則性を見つけ出すことは難しい。加えて、理論家も、このような生成する現象のなかにあって、それから隔離された静的な場所から状況をとらえることができるわけでもなく、この意味で自身もその状況に「拘束」されているからである。政治という領域においては、思想が違えば、立っている土俵自体も違う、というのがマンハイムの主張である。政治においては、厳密には、議論のための共通の土俵がないのである。

このように問題を掘り下げたうえで、マンハイムは、第2節において、その主張を検証することを始める。「認識そのものが政治や社会によって拘束されているというテーゼの証明」という表題が示す通りである。主だった政治の潮流をとりあげ、第2論文全体における根本問題である「理論と実践との関係」を、各々の思想がどのような概念連関を用いて理解しているか、とりわけ実践の部分をどのように扱っているか、ということをマンハイムはひとつひとつの思想ごとに吟味していくわけである。

マンハイムが検討していく5つの主義思想は、以下のとおりである。

- ① 官僚主義的保守主義
- ② 保守主義的歴史主義
- ③ 自由主義—民主主義的市民思想
- ④ 社会主義—共産主義的観念
- ⑤ ファシズム

(その2) では、最初の3つ、①官僚主義的保守主義、②保守主義的歴史主義、そして、③自由主義—民主主義的市民思想を扱った。

まず、①の官僚主義的保守主義は、「政治の問題を行政学の問題にすりかえる」基本傾向をもつとされている。官僚主義的保守主義の限界は、現在の法秩序や世界観以外にも、別様の秩序の可能性があると気づくことができず、それゆえ、「総体としての政治的現実」や生きるための異議申し立てを直接見据えることができない点である。したがって、マンハイムの考える「科学としての政治学」はこの思想圏においては、存在し得ない。「非合理的な活動の余地という領域」というのが、マンハイムの意味する「政治」であるが、官僚主義的保守主義は、この領域の存在を無視し、あくまで淡々と行政を行うことが秩序を生み出すと考えているからである。

次は、②の保守主義的歴史主義である。これは、①と同様保守主義の一種であるが、貴族や上流市民層のうちに支持層をもつもので、実は、①の官僚主義と結びついた保守主義とは、相容れないものである。それは、この思想が、官僚主義的保守主義が排除していた、非合理的な領域を知っているからである。したがって、この思想は、マンハイムの意味での政治の存在を認めるが、それは系統立って知識化したり、教授したりすることができないものであると考える。政治に必要なのは、歴史学や行政学といった知識ではなく、長い伝統によってのみ培われる本能、選ばれた貴族たちの精神としての「魂の力」なのである。

官僚主義的保守主義は、マンハイムのいう政治の領域を認めず、保守主義的歴史主義は、その領域を認めるが、一般に教えられるものではないとする。そして、この対比は、官僚主義的保守主義を体現する官僚と、保守主義的歴史主義を体現する貴族というアクターの対比としてもとらえられている。マンハイムの考える「科学としての政治学」はいずれの思想圏にも見いだされないのである。

(その2) で最後に扱ったのは、③の自由主義—民主主義的市民思想についてであった。この思想圏の中心的思考方法は、主知主義である。主知主義は、近代の一般的な傾向であり、理性や知性によってすべての物事を普遍的に理解・処理すべきで、またそうすることが可能と考えるものである。人々の感情（意志、欲望、怒りなど）は排除され、社会階層も考慮すべき変数とはならない。すべてを知性化する力が働いている主知主義においては、当然、「科学としての政治学」もその必要性が認識されており、実際にその基礎づけとしての制度構築が行われている。それらは、議会であり、選挙制度であり、国際連盟組織、大学の政治学科といったものの

整備である。また政治という学の中心領域として、国家にまつわる目的設定と、歴史、そして理想状態への移行方法について、という3つの学説を含む、いわば国家学が想定されている。

しかし、マンハイムは、こういった傾向をむしろ、主知主義の限界にとらわれているものとみている。この思想圏はマンハイムが政治とよぶ非合理で流動的なものに「型」を押しつけ、理論から実践や感情を排除し、表面的に形式化、知性化しているだけで、その本質を受け止めようとはしていないからである。近代主知主義は、「感情に支配されがちな評価的思考をどうしても許すことができない」のである。すべてを理性的、知性的、客観的に評価し、討議を通して解決するべきで、主観的な評価は当てにならず、いずれ客観的なものに回収されるべきものと主知主義は考える。非合理で流動的なものと合理的なものは、実は根本的な認識の構成要素において切り離しがたく結びついているのではないかと、また、価値判断を一切抜きにした論理構成ですべての領域を埋め尽くすことは不可能なのではないかといった考えは、等閑視される。市民層の主知主義は、このような根源的な問題に煩わされることなく、「迷うことなき楽天主義をもって、ひたすら非合理主義を完全に払拭した領野の獲得をめざす」(222)のである。このように、市民層が、極端な主知主義をもって、歴史に登場するのは、それが歴史主義的保守主義に対抗する必要があったからである。本能や魂の力といった極端に主観的なものを前景化している貴族のイデオロギーに対抗するためには、それを否定するしかない。

3 Study Question Methodによる読解—「2 認識そのものが政治や社会によって拘束されているというテーゼの証明」(中間部)を読む(223-236)

第1節「なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか」に続く、第2節「認識そのものが政治や社会によって拘束されているというテーゼの証明」で、マンハイムが検討している5つの主義思想は、次のようなものであった。

- ① 官僚主義的保守主義
- ② 保守主義的歴史主義
- ③ 自由主義—民主主義的市民思想
- ④ 社会主義—共産主義的観念
- ⑤ ファシズム

(その2)では、最初の3つ、官僚主義的保守主義、保守主義的歴史主義、そして、自由主義—民主主義的市民思想を扱ったので、本稿では、④の社会主義—共産主義的観念から始めることとなる。該当するスタディ・クエスションは、以下のとおりである。

SQ5. 社会主義—共産主義的思想について

〈イデオロギー、存在拘束性に関して〉

- SQ5-1. 社会主義は、どの階級層と敵対しているか？
- SQ5-2. マルクスのいうイデオロギーとはどのようなものか？
- SQ5-3. マンハイムによれば、社会主義において用いられているイデオロギー概念にはどのような「過ち」があるか？
- SQ5-4. マンハイムはこのような社会主義において用いられているイデオロギー概念を、どのようにして社会科学研究に利用できるようなものに作り替えようとしているか？「存在拘束性」という概念をつかって説明しなさい。

〈理論と実践の問題に関して〉

- SQ5-5. 現実弁証法とはどのようなものか？その3つの段階とは？
- SQ5-6. マンハイムが、「社会主義—共産主義理論は直観主義と極度の合理化への意志との綜合だ」(228)というとき、それはどのようなことを意味しているか？
- SQ5-7. マルクス主義理論によって取り出された構造上の傾向とはどのようなものか？
- SQ5-8. 社会主義は、社会学的にみてどのような階級を代表した理論だと言えるか？[問5-1と関連]
- SQ5-9. 社会学的にみれば、マルクス主義のもつ「極端な理論化への要求」(232)は、どのように説明されるか？
- SQ5-10. 弁証法でいう「転化」(234)の概念とはどのようなものか？
- SQ5-11. マルクス主義は理論と実践の問題に対してどのようにアプローチしようとしているか？保守主義および自由—民主主義との比較において述べなさい。

複雑な議論が続くので、〈イデオロギー、存在拘束性に関して〉と〈理論と実践の問題に関して〉として、大きく二つの部分に分けてある。まずは、最初の部分を読解し、この主義の基本的な特徴をとらえていきたい。

4 SQによる読解：社会主義について (223-236)

- SQ5-1. 社会主義は、どの階級層と敵対しているか？

マンハイムは、こう書いている。

市民層という敵対者との闘争のなかで、マルクス主義は、歴史や政治上の事物には純粋な

理論は存在しない、という事実を新しく発見した。(223)

社会主義に対しては自由主義の担い手であった「市民層」が敵対者として登場している。そして、純粋な理論は存在しないとしていることから、市民層の思想基盤の重要な要素である主知主義とも、敵対しているのである。

さて、ここで、社会主義の理論を扱うにあたっての断り書きについて触れておきたい。彼は、「社会主義」という言葉を「共産主義」と区別せずに使うとしており、近代における重要な思想間の差異を際立たせるために、それぞれの思想の重要な傾向を取り出し、特徴づけることを主眼とした分析である旨、述べている。つまりは、自身の目的に適う観点からの、理念型による議論を行うという趣旨である。

SQ5-2. マルクスのいうイデオロギーとはどのようなものか？

答えは、以下の部分である。

どんな理論の背後にも特定の集団によって制約された見方が働いている、ということがここで見ぬかれる。こういうふうに、思想が利害関係や社会や自然条件によって制約されている現象を、マルクスはイデオロギーと呼んでいる。(223-224)

ここで、この第2論文において初めて「イデオロギー」という言葉が登場する。マルクスが一番初めにイデオロギーという現象に光をあてたわけであるが、マンハイムは、このことを「きわめて重要な発見」であり、「政治思想一般に通じる問題の核心を含むものである」と評価している。マルクスの考えるイデオロギーとは「思想が利害関係や社会や自然条件によって制約されている現象」である⁶。

SQ5-3. マンハイムによれば、社会主義において用いられているイデオロギー概念にはどのような「過ち」があるか？

マンハイムからみると、社会主義ないし共産主義流に考える場合におけるイデオロギーの誤りは以下の2点である。

- (ア) 「政治思想におけるイデオロギー的なものを敵の側に認めるだけで、自分の思想は疑いもなくイデオロギーを超えていると思いこんでいる (224)」という点
- (イ) 「意識的政治上の欺瞞という否定的な評価を含んだ意味 (224)」のみで使われている点

マンハイムが問題とするのは、第1に、イデオロギーを相手の思想にのみ認め、自分の思想はイデオロギーを超えているとしてしまっている点である。それゆえ、社会主義ないし共産主義流の言説においては、イデオロギーは、「意識的な政治上の欺瞞」という否定的評価を伴うものになってしまう。

マンハイムがこれらの「過ち」を指摘しているのは、イデオロギーという概念を社会学的に有用な概念に彫琢することを望んでいるからである。マルクスが発見したイデオロギーというのは、「政治思想一般に通じる問題の核心を含むものである」がゆえに、その有用性をとことん追求すべきであるマンハイムは考えている。ブルジョワジーという特定の層に属する考え方であるというのがマルクス主義の発見であった。それは画期的な展開だったが、マンハイムは、ならば自らの思想はイデオロギーと無縁なのかと問いかけた。社会主義において、イデオロギーは相手のウソを見破り、糾弾するという否定的な意味合いで使われていたが、どのような立場にいる人間もイデオロギーから自由でいることが不可能であるのなら、その否定的な意味は消え、より中立的なものに仕上げることができる、というのがマンハイムの考えていることである。

SQ5-4. マンハイムはこのような社会主義において用いられているイデオロギー概念を、どのようにして社会科学研究に利用できるようなものに作り替えようとしているか？「存在拘束性」という概念をつかって説明しなさい。

マンハイムは、イデオロギー概念を、先にみた2つの偏りから解き放つことにより、その概念のもつ本質的な意味と意義をより一層混じりけのないものとして取り出し、社会学的に有用な概念として再構築しようとしている。マンハイムはイデオロギーを「特定の歴史や、社会における存在位置に必然的に属している見方、およびそれと結びついている世界観ないし考え方(224-225)」として再定義し、こういった思想の存在拘束性の説明を続けている。

イデオロギーという概念のうちには、どんな政治や歴史思想も、必ず社会や自然条件に制約されている、という洞察があらかじめ示されている。この洞察を一面的な政治的被覆から引きだし、首尾一貫して仕上げてゆくことが大切なのである。歴史をどう見るか、どうやって与えられたものから全体状況を構成するかは、人が社会の流れそのもののうちのどこに立っているか、にかかっている。…(中略)…この場合、思想の存在拘束性は、必ずしも誤謬の要因を意味するとはかぎらない。逆にしばしば政治上の出来事の性格を浮き彫りにするのに役立つ。(225)

思想の存在拘束性、つまり、イデオロギーという概念を社会学的に彫琢したもの、とは、簡

潔にいえば、思想が存在の関数であることを意味する。存在とは、利害関係であり、社会（階級）であり、自然条件であり、社会での立ち位置を含むものである。

存在拘束性：利害関係＋社会（階級）＋自然条件＋社会的立ち位置

社会主義に先立ち検討した主知主義では、普遍的な知識がある、という立場だったが、マルクスは、これを社会主義の「敵」に対してのみ否定した。マンハイムはこれを全面的に否定するわけである。

したがってわれわれの考えるところでは、イデオロギーという概念のもつ重要性は、政治思想における社会的な存在拘束性を発見した、という点にある。これこそ、しばしば引用される「人間の意識が人間の存在を規定するのではなく、逆に人間の社会的存在が人間の意識を規定する」というマルクスの命題の核心的意義である。(225-226)

先に述べた「過ち」からイデオロギーという概念を解放することによって、よく知られているマルクス命題の核心的意義が、より一層明確になる。

このように、イデオロギーというマルクスの発見、そしてそれを自身へも再帰的に適用することによって構築した社会学的な存在拘束性の概念は、社会学にとって非常に有益なものであるとマンハイムは考えており、その存在拘束性の限定性が負ではなく正の方向に作用することに注意をうながしている。これが、「誤謬の要因を意味するとはかぎらない」という部分で述べられていることである。

どんな歴史や歴史上の業績についても、どのような視座からものごとが見られていたかを確認することができる。この場合、思想の存在拘束性は、必ずしも誤謬の要因を意味するとはかぎらない。逆にしばしば政治上の出来事性格を浮き彫りにするのに役立つ。(225)

マンハイムは「存在に規定されている、だからその思想はあてにならない」とは考えておらず、むしろ、特定の位置に立っているからこそ非常に明確に見えてくるものがあると述べている。つまり、このような限定条件がつくからといって、それが、間違った認識を引き起こすものではないということを、強調している。それは、むしろ、ある政治上の出来事の深い理解をもたらすものである。マンハイムは存在に拘束された思想はそれ自体価値のあるものだと考え、むしろ、認識基盤が存在に拘束されていることを忘れてしまって、一つの思想が全てに当てはまると考えることの危険性を指摘しているのである。

さて、この存在拘束性は、マルクスの提唱したもう一つの考えとも深い関連を持っている。

もう一つの考えとは、弁証法であり、それは、マンハイムが今まさにこの第2論文で追求している、理論と実践の関係と深く切り結ぶものである。

[理論と実践の問題に関して]

SQ5-5. 現実弁証法とはどのようなものか？その3つの段階とは？

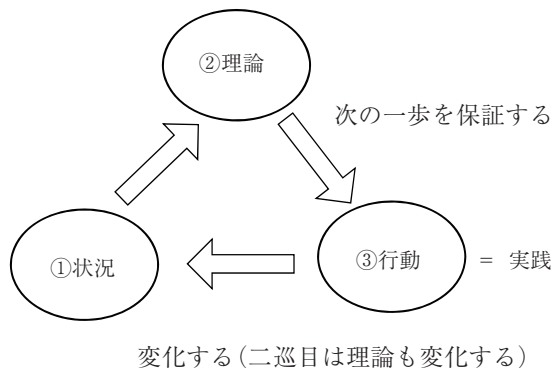
彼はこう書いている。

理論と実践との弁証法的な関係は、まず理論が——社会的な動機から生まれてきて——状況を明らかにするところから始まる。次に、明らかにされたこの状況のなかに立ちいって行動が行われることによって、現実そのものが変化を起こす。それとともにわれわれは、現実のうちの別の位置を獲得し、そこからさらに新しい理論がうまれてくる。(227)

つまり、現実弁証法において：

- i. 理論は現実の関数である。
- ii. この理論は特定の行動をひき起こす。
- iii. 行動は現実を変化させる。あるいは、それがうまくゆかない場合には、理論が修正される。
行動によって変えられた現実状況は新しい理論を生みだす。

この3つの段階は以下のような図で理解できる。



ここで先の引用の最後の行、「別の位置」に注目したい。これを存在拘束性との関連で捉えるならば、厳密に言えば、最初の位置にいたときは、社会状況が変化することによって、視点も、別の位置に移り、ゆえに異なる存在拘束性を引き受けなければならないのである。

社会主義のこのような理論と実践の関係に対する考え方を、マンハイムは評価して「すでに

この問題についての議論が、かなり進んだ段階に到達した」(227)と書いている。というのは、社会主義がでてくるまでは、まったくの非合理主義（保守主義的歴史主義）と、極端な主知主義（自由主義—民主主義的市民思想）という二つの極端な立場しかなかったからである。この点については、SQ5-11で再度取り上げる。

SQ5-6. マンハイムが、「社会主義—共産主義理論は直観主義と極度の合理化への意志との綜合だ」(228)というとき、それはどのようなことを意味しているか？

マンハイムはこう説明している。

社会主義が直観主義の要素をもつという意味は、たとえ傾向としてでも絶対的な予測は拒否されるからである。また合理主義の要素をもつといわれるのは、いかなる瞬間にも、新しく目撃されたものは合理化されなければならない、という要求につらぬかれているからである。どんな瞬間にも、理論なしの行動は許されない。しかし、状況から成立した理論は、もはや先行する理論と同じ平面に立っているのではない。(228)

社会主義がもつ直観主義的要素とは、弁証法により再帰的な構造が想定されていることにより、一旦たてた目標や予測を静的なものとして絶対的に維持する余地がないからである。また、合理主義的要素とは、弁証法において、状況は行動を直接引き起こす位置になく、理論を経由しないと行動に到達できないことを指している。状況の新しい側面が、理論化されることにより、常に理論は変化をしていくが、その時々々のそういった理論が提示する短期的な予測は、存在するからである。まとめると、以下のようになる。

直観主義	現実弁証法においては、絶対的な予測が拒否されるから	絶対的予測：なし
合理主義	どんな瞬間にも、理論なしの行動は許されないから	短期的予測：あり

そして、マンハイムはこれを称して、以下のように述べている。

これこそ、非合理的な活動の領域のただなかに置かれ、この非合理性を知りながらも、なおかつ合理化を断念しようとししない人間の綜合の営みであろう。(228-229)

この、「非合理的な活動の領域のただなかに置かれ、この非合理性を知りながらも、なおかつ合理化を断念しようとししない人間の綜合の営み」が、マンハイムの考える政治である。マンハイムは、この政治の領域において、マルクス主義思想は、非合理的活動の余地を否認していない

として、今までみてきた3つの思想と比較している。

思想	「非合理的活動の領域」の扱い方における主な特徴
官僚主義的保守主義	行政で覆い隠す
主知主義（自由—民主主義）	まるで合理的であるかのように表面的に取り扱う
保守主義的歴史主義	全く合理化が不可能なものとして取り扱う
社会—共産主義	構造的傾向として捉える

社会主義は、「非合理的な活動の余地」＝政治を、「まったく合理性をもたない恣意的なもの、全然見通すことのできないもの」（229）とは、みていないからである。それは、「特定の法則に従って繰り返して現われるような静的」（229）なものではないが、「一般に起きる可能性のあるものが何もかもここで起こってくるわけではない」（229）のである。

そして、このこと、つまり、法則で決定されているものではないが、あらゆることが起こりうるわけでもない、このことが「決定的」だと、マンハイムは考えている。政治は「法則」で動いているわけではないが、完全に「アトランダム」なわけではない。「政治という活動の領域は、それ自身ある種の傾向をおびている」のである。全く恣意的でもなく、他方、完全に法則に則っているわけでもない政治という領域に対して、どういったことがどのように起こりうるか、さまざまな諸傾向をすべて摘出し合理化しようとするのが、マルクス主義だとしている。それでは、この傾向とはどのようなものであろうか、それが次のSQで取り上げられる。

SQ5-7. マルクス主義理論によって取り出された構造上の傾向とはどのようなものか？

マルクス主義理論によって取り出された構造上の傾向（＝法則に準ずるもの）は、以下の通りである。

- i. 経済：政治の領域は、生産諸関係によって担われ特徴づけられる。この生産関係も動的な構造連関としてとらえられる必要がある。
- ii. 社会：経済的要因のさまざまな変化は、階級関係の交替と密接に結びついており、それは同時に、権力様式の交替と権限のたえまない再配分を意味する。
- iii. イデオロギー：そのときどきに人間を支配する理念（＝政治的理念）の世界は、内部構造の面でも見通し認識することができるし、構造変化の面でも理論的に規定することができる。

ここで、究極の法則はみえないが、3つの方向は見える。そして、これら3つのそれぞれの理解

と追求に加えて、さらに重要なことがあるとして以下のとおり、述べられている。

だがはるかに重要なのは、この三種類の構造連関が、たがいに切り離して認識されてはいない、という点である。これらは相互に連関しあって、まさに一つの統一された問題圏をつくりあげている。すなわち、イデオロギーの構造は階級の構造と独立に変化しはしないし、階級の構造は経済の構造と独立に変化することはない。そして、このような経済、社会、イデオロギーという三様の問題性の結びつきと絡みあいのうちにこそ、マルクス主義思想の特殊な強みがある。(230)

マンハイムは、これら3種の構造連関の絡み合いをみることに、マルクス主義の積極的な面があるとしている。「一つの統一された問題圏」をみるのが、構造上の全体性をつかむことにつながるからである。そして、(その1)で読み解いたように、マンハイムにとっては、「学」といったより広範な知識体系は、この全体的な連関が見えて始めて形成されうるからである。

こういう総合力をもつからこそ、はじめてマルクス主義は、過去にたいすると同じく、まだ生成しつつある活動領域にたいしても、構造上の全体性という問題をいつも新しく立てることができる。だがそうだとすると、マルクス主義は、相対的な非合理性を認めながら、それを厳密に認識しようとする、というパラドックスを犯すことになる。(230-231)

マルクス主義の強みは、経済、社会、イデオロギーという三種類の構造連関がさらに互いに関連し合っているということを認識していることである。このような統合的な知識体系は、もちろん存在拘束性で限定されてはいるが、そうであっても、その体系は、過去に対して適用することができるのと同様、今現在、生成しつつある活動領域にも適用可能なのである。

しかし、この厳密な認識に対する意志は、他方で相対的で非合理的な領域を正面から受け止めようとしていることと、矛盾することになる。この点を、マンハイムは、そもそも社会主義は、どのような階級を代表する理論かという問題を掘り下げることで答えようとする。それは、革命という契機に関連することである。

SQ5-8. 社会主義は、社会学的にみてどのような階級を代表した理論だと言えるか？[SQ5-1と関連]

マンハイムは上記のように、マルクス主義の強みを分析した上で、さらに、社会学者としての視点から、これは、どのような歴史的・社会的位置から生まれたものか、と問うている。つまりは、マルクス主義そのものの存在拘束性を問題にしているわけである。

極端な非合理主義を極端な合理主義と結びつけることによって新しい種類の〔「弁証法的な」〕合理性が生まれる、というマルクス主義の特性は、何から説明されるだろうか。(231)

これに依えて、マンハイムは、社会学的にみれば、マルクス主義は「ある特殊な新興階級の理論」(231)であるとしている。そして、この新興階級の特徴を次のように描いている。この階級は、「目先だけの成功に甘んじないという点では、暴動主義者とは区別」(231)され、そして、「予測しがたいさまざまな状況にいつも油断なく気を配って」(231)いることが要求されている。かれらは、「揺れ動く大衆」(231)ではなく「組織された歴史的集団」(231)を構成しなければならなかったのである。そしてこのような集団に対しては、長期の展望を提供せざるを得ない。

どんな理論にせよ、階級的立場をふまえた理論、揺れ動く大衆のためにではなく、組織された歴史的集団のためにつくられた理論は、いずれも長期の展望を備えた立場をとらざるをえない。そのためには徹底して合理化された歴史像が必要になるのであり、それに基づいていつも、人はどこにいるのか、運動はどんな段階に達しているのかを問うことができる。(231-232)

人々をまとめるためには、過去と将来にわたる合理化された理論が必要だからである。マンハイムは、この長期の展望と合理化された歴史像の必要性をさらに社会学的に分析していく。

SQ5-9. 社会学的にみれば、マルクス主義のもつ「極端な理論化への要求」(232)は、どのように説明されるか？

マンハイムはこう書いている。

マルクス主義のもつ極端な理論化への要求は、したがって社会学的にみれば、人々が接触を通じてではなく、広大な社会空間のなかで似たような構造をもつ状況によって結束を固めなければならないような、そういう階級構造に対応しているのである。(232)

つまり、理論化においてのみ、この階級は集団としての結束を保つことができるのだということが述べられている。資本主義以前の共同体の要素が支配する集団においては、伝統や共通の感情で結束することが可能であり、理論はむしろ必要のないものである。しかし、今や崩壊してしまった共同体にかえて、社会経済構造上の類似性で結びつくしかないなかでは、理論しか結びつけるものはない。「感情に訴えての結合は近いところにしか通じないが、理論化された世

界像は遠くのものをも結合させる力をもつ」(232)からである。

ここにおいては、必ずしも同じ空間にいるのではなく、社会階級的に同じ構造上にいることが肝心であり、それはたとえば国が違って、社会的に似たような状況のなかにおかれているということで統合していくような集団という意味合いとなる。空間的に同じ場所にいるわけではないが、その人たちが置かれている社会構造上の類似に基づいてまとまろうとしている集団を意味する。より具体的にいえば、万国の労働者に訴えるにはプロレタリアートが置かれている階級状況に言及し、それを理論化することが最も有効なのである。

こういう極端な合理化傾向は、プロレタリアートが置かれている階級状況そのもののうちに根ざしているといえよう。この階級の野党的位置と、それにもましてその宿命的な革命的姿勢のうちに、この立場の合理性の限界が見いだされる。(232-233)

マルクス主義においては、色々な場所に散らばっている者を結束するために理論が必要であり、そのため、非常に強い理論化への要求がある。しかし、この階級が、野党的位置、つまり、自らが政治の中心になることを希求している位置にいて、変革を望んでいる限りにおいて、この極端な合理化は、どこかで止まらなければならないとマンハイムは述べている。

革命というからには、どこかで合理的機構の破壊をたくらみ狙っているところがないといけない。革命にあたって要求されるのは、襲撃を敢行すべき好機の瞬間の到来へ向かって待機していることである。もしも人が、政治の全領域はあますところなく合理化されている、と考えるとすれば、彼は好機の瞬間の到来を待ちかまえたりはしないだろう。しかし「瞬間」とは、まさしくあの「今こそここで」[hic et nunc]という非合理的なもの以外の何ものをも意味しない。それは、一般化をたてまえとする理論によってはひとしく蔽い隠されてしまう。だが人が革命を必要とし革命を意志するかぎり、この破壊の瞬間を見すごすことは許されない。そうだとすれば、非合理的なものはそのまま価値をもつことになり、整然とつくられた理論のうちに、ある裂け目が生じてくる。(233)

すべてが合理化されてしまったのなら、「今こそここで」という革命の好機を探すことはできないはずである。つまり、社会主義は理論化に強い欲求をもっているが、そこに必然的に非合理的なものが入ってきてしまうのだと述べている。マンハイムは、社会主義のなかの、理論という合理化と、合理化を許さない要素との関係を様々な角度から論じており、この議論が次の「転化」ということにつながっていく。

SQ5-10. 弁証法でいう「転化」(234) の概念とはどのようなものか？

マンハイムは、合理的な要素と非合理的な要素がどのようにかかわっているかについて、弁証法の「転化」という概念をもちいて詳しく説明している。

弁証法でいう「転化」の概念のうちにも、この非合理性の要素がひそんでいる。(234)

まず「転化」とは、どういうことだろうか。これについては巻末の訳注(3)で次のように述べられている。

量的な増大がある段階までくると、質的に別のものになる場合、量から質への転化が行われた、というふうに使われる。(261-262)

簡単に言えば、質量転換のことである。量質転換、と表現した方が通じやすいかもしれない。量が質に変わるという意味で、あることの頻度が増えていくと、単純に足しただけのものではなくなり、そのものの自体の質が変わってしまう。簡単な例では、たとえばスポーツでスタートの練習を100回、200回と重ねると自分の身体が変化するなどの変容が生じて行為の質そのものが変わる。そのようなイメージである。数が変化することにより、質まで変わってしまう現象のことである。そのように考えると、それ以降にある「数学的に計算することができない(234)」という表現の意味を理解できる。

政治の領域を支配しているさまざまな傾向が転化を起こす場合、われわれは、その領域内に蓄積されてくる諸力を単純に数学的に計算することはできない。むしろそれらが本来の傾向から投げだされ、突然「転化」が起こる、という仕組みになっている。この転化を計算で予知することはもちろんできない。むしろ反対に、ますますプロレタリアートの革命的行動が必要なのである。こうして、主知主義は万能なのではないことが証明され、逆に、非合理性を把握するうえで欠くことのできない洞察が二つの方向に開けてくる。そしてそれとともに二つの非合理的要素が指摘される。(234)

このように劇的な変化が起こるところでは、主知主義は、成り立たない。単純に数学的に計算できるなら主知主義で理解できる範囲だが、計算できない非合理的なものが入ってくるので主知主義は実は万能でない、ということがわかってくる。それがわかった時に変化の「二つの非合理的要素」(234)をもう少し詳しく観ることができる。それらは何だろうか。

第一は、支配的傾向がいつ成熟して転化するにいたるかを計算することはできないし、政治的な勘に頼るほかはない、という洞察である。第二は、歴史の動向を計算する場合には、計算する行為そのものが、その動向の構造を変化させる干渉となり、それを免れるほど精密な決定には到達できない、という洞察である。(234)

これら二つの非合理的要素は、それぞれ以下のように説明できるであろう。

- 1) 力が強くなっていった時に、いつ、社会Aが全く異なる社会Bになるのか、は計算できない。その把握は勘に頼るしかない。これは、先にみた直観主義を想起させる。
- 2) 計算しようとしても、それを計算する行為そのものが状況への干渉となり影響を及ぼす＝計算する行為そのものが現実に影響してしまう。つまり、予測する行為は社会の外ではなく社会の中で行われているので、予測する行為自体もその状況に影響する。これは、理論家の存在拘束性である。それは、「動向」を変化させるだけでなく、「動向の構造」をも変化させるのである。

特に、第2の点については、量子力学における観測者効果（＝観測するという行為が観測される現象に影響を与えてしまうこと）といった考え方を想起させるものである。このような非合理的要素を合理的に明確化していることを指して、マンハイムは、マルクス主義的思考方を「非合理的行為の合理的思考」(234) と評している。

少し整理すると、マルクス主義においては、非合理的活動の余地のある領域（＝政治）を、「構造の傾向」（≡法則）としてぎりぎりまで合理化しようとしていた。しかし、この傾向は転化するものである。となると、その「転化の法則性の探究」をしなければならない、と考えられた。これが、「非合理的行為の合理的思考」(234) である。そういった弁証法的要素を固守する立場として、マンハイムはレーニン主義を挙げている。

弁証法的思想とは、まさしく非合理主義と融合した合理主義思想であり、いつも、

a われわれは現在社会的な歩みのなかでどのような位置にいるのか、

b 今現在の時代の要請は何か

という二重の問いに答えを与えようと努める。(235) ⁷

aは、歴史的思考のなかで現在位置を決めようという「理論」的な問いである。そして、他方、bは、今求められていることはどのようなことか、という「行動」についての問いである。すなわち「実践」を意味する。したがって、「この立場から見れば、行動はけっして衝動的に起こされるのではない。社会学的に見られた歴史に基づいて行われる」(235) のである。ここに、

マルクス主義における理論と実践の関係が見いだせるであろう。

そして、このような理論と行動の関係をマンハイムは以下のようにまとめている。

理論は、本質的に行為によって制約されているという性格を脱することはできないし、また、逆に行為は、理論形成に不可欠の要素なのである。(235)

理論は行動によって制限されている一方で、行動は理論形成に不可欠の要素なのである。

SQ5-11. マルクス主義は理論と実践の問題に対してどのようにアプローチしようとしているか？保守主義および自由一民主主義との比較において述べなさい。

マンハイムは今まで述べてきたことを以下のようにまとめている。

非合理主義という面に関していうなら、この理論は、歴史的—社会的活動領域は固定した対象に満たされているのではないから、もっぱら法則を追求する方法は役に立たない、という見解をとる。さらに政治という領域を支配している傾向が完全な動的な性格を持つことも認める。政治思想が生欲と結びついたものであることを認めるから、理論と実践とを人工的に切り離そうとはしない。その反面、合理主義的傾向をあわせもつこの理論は、これまでの合理化がむなしく終わったところからも、さらに合理化を進めようとする意志をもっている。(235-236)

社会主義理論（＝弁証法的思考法）の積極的な面は、第一に、政治思想は理論化できる領域とは本質的に別であるということをはっきりさせたことである。それは、行動に結びつかなければならないからである。したがって、主知主義的に法則のみを追いかけても有効でないという立場をとる。また、政治が動的であることも、了承している。加えて、政治思想が生々とした生の領域とも切り離せないものであることも認めるので、社会主義理論は、「理論と実践とを人工的に切り離そうとはしない」のである。

こうして、市民層の透徹した主知主義が表面的にしか扱えなかった実践の非合理さや、歴史主義が、極端に非合理なものとして扱った実践の領域が、社会主義においては、「これまで合理化がむなしく終わったところからも、さらに合理化を進めようとする意志をもって」、弁証法的思考にとりいれられているのである。この部分は、SQ5-5で扱った227ページの最後の段落を再度詳しく展開しているといえる。227ページの該当部分は以下のとおりである。

理論と実践の関係をこういう仕方（弁証法的に）解くことは、すでにこの問題について

の議論が、かなり進んだ段階に到達したことを感じさせる。いうまでもなく、この解決以前には、極端な主知主義とまったくの非合理主義という二つの一面的立場しかなかった。(227)

ヒント¹⁴ このように論文の中では離れた部分で同じことを言っていることが散見されるが、それを見つけるのは全体を理解するために重要である。

ここまで共産主義についての整理がなされた。次稿では、ファシズムの思想基盤についての部分を読み進むこととなる。

¹ この部分は、長島美織, 2017, 「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちるか——理論と実践の問題」(マンハイム)を読む——(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70, 59-76の冒頭(59ページ)と同等の内容であるが、本稿が依拠するスタディ・クエスチョン・メソッドの骨子説明のため、繰り返して掲載している。スタディ・クエスチョン・メソッド及び学問的読みについては、「『保険とリスク』(フランシス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1: 第1段落から第4段落: **insurance** について」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24: 109-24 内の「1 はじめに」(P.110-113)にさらに詳しく説明しているので、併せて、参照されたい。

² 「『保険とリスク』(フランシス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1: 第1段落から第4段落: **insurance** について」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24: 109-24 およびその続編は、英語の古典的論文を、この方法で読もうという試みである。

³ 本稿は、2011 年になされた北海道大学大学院国際広報メディア学院での講義に基づいている。糸川悦子さん、小塚洋平さんをはじめとした、参加してくれた院生の皆さんに感謝する。志子田敦子さんは、特にその講義の詳細な記録を作成して下さった。本稿はその記録をもとに、加筆修正したものである。

⁴ 以下の研究ノートを指す。長島美織, 2017, 「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちるか——理論と実践の問題」(マンハイム)を読む——(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70, 59-76。

⁵ 以下の研究ノートを指す。長島美織, 2018, 「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちるか——理論と実践の問題」(マンハイム)を読む——(その2)」『メディア・コミュニケーション研究』71, 143-167。

⁶ この第2論文で使われているイデオロギーは、『イデオロギーとユートピア』のなかに収められている第1論文における全体的・普遍的・没評価的イデオロギー概念に相当する。第3論文である「ユートピア的意識」で使われているイデオロギーは、評価的イデオロギーである。

⁷ ここで、a と b は、英語訳 (Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge, A Harvest Book, Harcourt, Inc. First published in 1936.) を参考に筆者が異なった訳を提供している。本稿が依拠している『イデオロギーとユートピア マンハイム』(高橋徹・徳永恂訳 中公クラシックス 中央公論新社 2006 年)においては、以下のように訳されている。

a われわれはどこで歩みをとめるのか、

b 非合理的に体験された瞬間とは何を意味するか、

他方、該当する英語訳(上掲書、133 ページ)においては、以下のようになっている。

a what is our position in the social process at the moment?

b what is the demand of the moment?

前後の部分との関連も考慮して、英語訳により近い日本語訳で置き換えた。

《SUMMARY》

Reading Classics through Study Questions

---'THE PROSPECTS OF SCIENTIFIC POLITICS: The Relationship between
Social Theory and Political Practice' by Karl Mannheim---Part3

Miori NAGASHIMA

This is the third part of a series of an attempt to propose and demonstrate a new method of reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to grapple with. The proposed 'Study Question Method' helps students read through and understand the target academic manuscript precisely and critically. The sample piece selected in this series of essays is 'THE PROSPECTS OF SCIENTIFIC POLITICS: The Relationship between Social Theory and Political Practice', the second article in "IDEOLOGY and UTOPIA" by Karl Mannheim (1893~1947). This part 3 examines the middle part of Section 2 of the article, which deals with socialism. It consists of study questions, and corresponding answers and comments.